



日本

ハンザキ研究所ニュース 2011(4) : 通巻 No. 64

発行 2011年4月30日

〒679-3341 兵庫県朝来市生野町黒川292

Tel/Fax: 079-679-2939

E-mail: info@hanzaki.net

URL: <http://www.hanzaki.net>

NPO 法人 日本ハンザキ研究所 栃本 武良

大物たち (“オオ” づくし・・・)

ハンザキも大きいがゆえにオオサンショウウオと名を変えられてしまった。第3展示室の植物標本には“大サンショウ”の木(当ニュースNo.45)や大シイタケ(当ニュースNo.15)の他にも大ススキ(高さ3尺)、大ツクシ(28匁)、大スギナ(30匁)などの大物がコレクションされている。サンショウは良い香りがするので“スリコギ”(今時の人には?)にしようと切り倒されたものを頂いた。シイタケは出荷するには同じ大きさでないと商品にならないとかで“シイタケ・ステーキ”用に頂いた。ジャンボなススキは草刈(地域の方々の年1回のボランティア作業)除外地区で見つけたものだった。大きなツクシとスギナも同様に雑多な草が茂った中で背伸びをしていたのだ。今年は、栽培しているウドを頂いて大木づくりに挑戦しようと思っている。どの位の“ウドの大木”ができるのだろうか?



水底からマングローブのようなスギナとツクシ

ところで校庭に作った“湿地ビオトープ”の水面から何やらニョキニョキと頭をもたげてきたものを見つけた。4月のなかばになってツクシの頭が確認できた。よくみると真っ黒な木の根のようなものはスギナだった。水生植物のほとんどない校庭に造られた池なので、他に競争相手のいない水域で群生することができたのだろう。どの位の大きさになるのか楽しみだが、3月のフキのとうに続いて春の恵みとしてツクシの一部を収穫してみた。年齢と共に指先が不器用になってきたのでハカマを除去するのがなかなか面倒だった。

もう一つ、50匁ほどの大セリはどうだろうか。当地の皆さんはセリを食べる習慣がないというが、これもまた春の恵みの植物だし、サンショウの新芽もそろそろ摘めそうだ。今年は棘のない“朝倉サンショウ”の苗を1本頂いたので比較してみたいと思っている。



写真1 シカに皮ハギされたフジ



写真2 ナガレホトケドジョウ



写真3 1トトラックの空き缶60キ。



写真4 ウメの皮ハギと木エボンド処置 (右)



写真5 クチベニマイマイの交接



写真6 南山のスギ・ヒノキの枝打ち

円山川水系におけるオオサンショウウオ事情 番外編

ナガレホトケドジョウの生息地を確認しました！

但馬国府・国分寺館 加賀見 省一

昨年2月のことですが、豊岡市日高地域の方から「ナガレホトケドジョウが見つかった」と言う連絡を頂きました。当日は不在だったため翌日に連絡を取り見せていただくことにしました。

ところでナガレホトケドジョウという名を初めて耳にされる方も多いのではないかと思います。当初はホトケドジョウと思われていたようですが、1993年に新種として発表されました（ハンザキ研ニュース 39 参照）。環境省は絶滅の恐れが高いことから、絶滅危惧種 I Bに指定しています。全長は6～7㎝、薄い褐色の体に4対8本のヒゲを持っています。ホトケドジョウに似ていますが、生息場所が異なることや黒斑を欠くこと、目から口にかけて黒っぽい線（暗色斜帯）があることで区別できます（写真2参照）。日本の固有種で東海地方や和歌山県から岡山県にかけての瀬戸内海側、四国、福井県から兵庫県にかけての日本海側などに分布していることが知られています。生息場所は山間部の自然度の高い川の源流部に局所的に分布していると言われていました。

連絡を頂いた翌日にお尋ねして、持参したアクリル・ケースに入れて観察し写真を撮らせていただきました。私自身は朝来市山東町の与布土川で見つかった個体を見たことしかありませんでしたので、大変に感動しました。その後、発見場所に案内していただき色々とお話を聞かせていただきました。近くには神鍋火山の溶岩（兵庫県の天然記念物“栃本の溶岩瘤”があり）、スコリア（多孔質の小石）、火山灰といった天然のフィルターを通して豊かで清涼な湧水源があります。この一帯は溶岩が細かく砕かれて敷き詰められ、そこから湧き出た水が流れています。また、ところどころに細い溝があり、栽培用のワサビの苗を籠に入れてつけておいたところ、ナガレホトケドジョウが入っていたとのことでした。

数か月後に、ご主人から手紙を頂きました。最近になって3㎝前後の幼魚も確認できたとのことでした。おそらく前年に孵化した個体と考えられます。豊岡市内では、これまでに数か所で生息が確認されていますが、日高地域では初めてのことで繁殖が確認されたのも初のことです。

河川の源流部で静かに暮らすナガレホトケドジョウ、生息すら人に知られず河川工事などで個体群が絶滅する危険性があります。個体群の絶滅を防ぐには事前の生息状況の把握が大切だと思いますし、マニアによる乱獲からも守っていかねばなりません。清流に生きるナガレホトケドジョウの生息環境を守っていくことは、人間にとっても暮らしやすい環境を後世に伝えていくことに繋がることだと思います。情報の提供やお忙しい中にご協力いただいた方々に厚く御礼申し上げます。

（栃本：ナガレホトケドジョウは河川の源流部にひっそりと生きている小魚です。時に、流れが伏流してしまうような河川では魚類調査も行われず、人に知られていなかったようです。干上がった川底の石をめくって発見した時の感動を私も忘れられません）

皮ハギ

カワハギといえばフグに近縁の海の魚を思い起こされるかもしれませんが、シカによる食害のことです。この冬には多くの皮をはがれた樹木が目立ちました。中でも幹周り30㍍もある近くのフジの木が地面から1.5㍍ほどグルリと皮を剥かれてしまいました(写真1)。土手の樹木の間で真っ白になっているので大変に目立ちます。こんなに太くなるのには何十年も掛かったことでしょう。それが餌不足に陥ったシカたちにやられたのです。今年1月は毎日のように雪が降り草は埋もれてしまい、積雪から頭を出しているササは食い尽くされて、多くが枯れています。たくさんの樹木の中からシカは食える樹種を探して届く範囲の皮をむいて食っているのです。地表を見るとフジの根なのかやはり白く皮を剥かれたものが縦横に走っています。

このフジはきっと枯れてしまうだろうと見てみると、新芽が出て花を咲かせています。ほっとしましたが、研究所の周辺で子ジカの死体を3つ見つけました。当ニュース62・63で紹介したタロー君のおやつもその1つですが、体力もない子ジカの死亡率は高いでしょう。一方で、構内に植えたウメも皮を剥かれてしまいました。地表から20㍍ほどの部分ですが、直径1センチほどの苗ですから、シカであつたら幹ごと食ってしまいそうです。ノウサギの仕業かもしれませんが、野生動物の苦難の冬です。事務局長から剥かれた部分に木工ボンドを塗っておくと枯れないですむと教えてもらったので処置しておいたら、やがて一輪の花を咲かせ元気に葉を伸ばしてきました(写真4)。

.....

植樹の試み

昨年の秋は山の幸ともいえる果実や木の実の大不作でした。今年はアケビにもたくさんの雌花が付いていて豊作になりそうな気がします。野生の植物も魅力がありますが、品種改良された実のなる樹木の植樹を試みています。リンゴは同じ品種ばかり植えても実が付かないと言われて“富士”と“津軽”を植えましたが、ネットを咬み破って侵入したシカに枝をバリバリと食われました。ミカンの仲間は寒冷のため無理だと言われたので止めましたが、カラタチの種を蒔いておきました。これも無理だと言われましたが、目下20㍍ほどと育ちが悪いなりに3冬を過ごしています。カラタチは白い花が奇麗ですし、アゲハチョウの幼虫を育て、秋になると黄色の実をたくさん付けて目を楽しませてくれます。その上に鋭い棘はどんな動物も寄せ付けることはないバリアーになります。一石四鳥といってもいいと思いますが私は再々痛い目にあっています。

イチジクは冬を越せませんでした。キュウイはカラーフェンスに巻きつけたらいいと考えていたのですが、外からシカに引っ張られて食われ1本が枯れてしまいました。そのほかにナシ、モモ、ウメ、クリ、グミ、ポポー、タラ、コウメ、カヤなどの植え込みをしました。これらが育ち花を咲かせ実を付けるのも楽しみですが、人間が食べるだけでなく野生の生き物の餌にもなることも考えてのことです。しかし、生野ダムの下まで押し寄せてきているサルは強敵です。昔は黒川にも生息していたそうですので。

お知らせ

① 姫路市立水族館リニューアルオープン (7月2日)

平成20年11月から大規模改修中であった水族館が、整備を終えて新館と共に再開されることになった。昭和41年の開館であるが、本館は同38年に市民プールを支える構造物として建設されているので、今年で46年にもなる。私が館長時代の平成8年から10年にかけても改修を行っていたが、今回は旧モノレール駅舎を新館として淡水系の生き物を展示するという。この“はりまの里地”コーナーの主はオオサンショウウオである。目下、その主たちは当研究所のプールで2年間を過ごし、間もなく里帰りする予定である。その他ホタルや水生昆虫、ヌートリアなどの展示も工夫されている。モノレール駅舎に長らく收藏されていた車体も昭和ノスタルジアの象徴としてこの度、一足早く公開された“手柄山交流ステーション”に展示されている。

昭和41年に開催された“姫路大博覧会”に合わせて水族館も仮・開館したが、連日押すな押すなの大盛況であったことが思い出される。同時にモノレールがJR姫路駅前から手柄山中央公園まで開通された。モノレールからは水族館が俯瞰できて良かったが、通勤に使う人もいたものの、5分間と言う短い路線でその後8年間の営業で休止された。鉄道マニアからは車体の撮影要求があったりしていたので、今回の公開は水族館ファンとは別の人の流れが起きているのではないだろうか。

② 日本オオサンショウウオの会 in 愛知県瀬戸市大会

第8回大会になりますが、ハンザキ分布の東限かと言われている瀬戸物で知られた地域である。例年9~10月に各地で開催されてきたが、今回は会場や他のイベントとの関係で10月1・2日に開催が決まりました。毎回100~150名もの参加者があり盛大な熱気の有る会になっています。特別にオオサンショウウオの研究をしている人たちだけでなく、関心を持っていたり、その生息環境である河川の保全活動などを行っている方がほとんどですが、できるだけ多くの方々に参加していただきたいと思っています。

本部事務局は当研究所が本年度から担当していますので、参加してみようと思う方は連絡ください。

③ 作業ボランティア募集

今年から初めての試みとして、ハンザキ研の整備を進めるためにボランティアの募集を月に1回実施します。第1回目は6月25日(土)10時~15時です。雨天の時は室内作業を考えています。この5年間は時にスタッフの手を借りることもありましたが、ほとんど私一人で勝手気ままにやってきました。しかし、昨年10月に脚立から落下して肋骨骨折、右手首脱臼とひどい目にあってからは大いに反省して年齢相応にポツポツとやることにしていますが、力仕事は無理になってきています。それと、複数の人の力を借りて進めるほうが効率のいいことは承知していますので、気楽に参加してください。4時間ほどの作業で、昼食しか提供できませんがハンザキの見学も兼ねてのイベント?です。作業できる服装でおいでください。

ハンザキ研日誌

2011年4月

- 1日 南側の山の杉桧の枝打ちを事務局長が実施（山主の助広さんの許可）写真6参照
- 4日 アルミ缶売却，120^{キロ}（6,000本）で12,000円となる（写真3参照）
- 5日 新品の1号ポンプ（保護センター）トラブル（増水でゴミが詰まったため）
- 9日 事務局会議、新事務局員2名（20台の竹村国宏・竹村正典両氏）と計11名
- 10日 カブトムシ幼虫約200匹受贈（白滝英雄事務局員より）
- 12日 オオサンショウウオの月例健康診断（今年度は株式会社ウエスコ担当）
- 14日 新しいパンフレット15か所へ各100部配布
- 15日 ・大阪シニア自然大学で講演
・兵庫県立大・三宅研究室来所（構内の案内看板検討）
- 18日 アサヒテレビ取材“奇跡の地球物語”（5月1日放映）
- 22日 水中小型カメラのデモ、購入決定
- 25日 ・兵庫県養父土木事務所他来所、市川（竹原野地区）委員会への打ち合わせ
・兵庫県姫路利水事務所所長他4名来所
・NHK“一寸変だぞ日本の自然”取材打ち合わせに
- 26日 総会資料、ハンザキ研ニュースNo.61~63などの発送作業，事務局員9名で
- 28日 本年の“第8回日本オオサンショウウオの会”in 瀬戸市の開催地事務局と打ち合わせに愛知県へ

.....

ハンザキ所長のツブヤ記録

ハンザキ研ニュースの原稿を考えるために、最近のバックナンバーを見返していた。No.62の写真6を見て？・・・思い込むと言うのは怖いものである。普段、ゴキブリのいない所なのでゾロゾロと出てくるカメムシのことを「ゴキブリみたいなヤツだ」と思っていたのが、そのままキャプションにしてしまったのだろう。印刷が半分くらいできてしまっていたので、申し訳ないことだが半数くらいの方にはミスのまま送ってしまった。どうも脳みその方が硬直してきたのかもしれない。

ビールの空き缶も溜れば凄い量になるものだ。以前は地域の方が売り払って福祉施設に寄附していたので協力していたが、足が不自由になったとのことで中止されている。たまりに溜った空き缶を見て、事務局長が売りに行ってくれた。その結果は120^{キロ}（12,000円）だった。トラックに積み込まれた様子を見て我ながら驚いたが、20^{リットル}の缶が6,000本という計算になる。1日6本のペースで約3年分だ。NPO法人の資金に組み入れたが、プルトップの方は車椅子購入の運動に回している。6,000本から一つ一つ取り外すのは面倒だが、飲み終わったつどに実施すれば簡単なことだ。皆さんもこのような簡単なことから、できることからいかがでしょうか。